



中央検査部だより



年頭のご挨拶



2016.1.20 発行 第55号

あけましておめでとうございます。

中央検査部 部長 高橋 徹

新年のスタートにあたり、年頭のご挨拶を申し上げます。

昨年4月に検査部での仕事に取り組み始めました。しばらくは、部内の状況や40人近いスタッフの活動を観察する日々でしたが、少しずつ、私なりの考えを伝える関係もでき、本年はもっと頑張れそうな素敵な予感がしています。

着任時の挨拶で申しましたが、私は、検査部は診療機能の基幹をなす極めて重要な部門の一つだと考えています。その診療活動の核となるべき検査部ですから、臨床現場のニーズに応えられる検査機器やシステムの拡充といったハード面での整備はもちろん必須ですが、一方では、技量向上や職能活動域の拡大など個々の検査技師の成長もソフト面での大切な課題として求められます。

近年、医療における生理機能検査の需要が高まり検査技師が患者さんに直接かかわる機会が増えています。また、複雑化した検体検査の解釈において臨床医から専門的な相談を受ける機会も増えつつあります。昨年来、こうした臨床現場の要請により応えられるよう、「臨床に開かれた検査部」をスローガンに掲げて、室谷技師長を先頭に一同が多くの改善と改革を進めてきました。

今年は、さらに一歩進めて、「臨床現場とつながる検査部」となれるよう、鋭意努力したいと思っております。どうぞ、ご期待下さい。

病理診断科 部長 田中 慎介

明けましておめでとうございます。今年は丙申（ひのえさる）で、丙は十干の三番目で本来「火の兄（え）」で、「大きな変革」とも解すことができ、甲乙丙の字でも知られています。申は本来、動物の猿ではなく、甲骨文では稲光の走る様にかたどり、のびる・天の神の意味を表します。十二支では九番目で、「呻（うめく）」「樹木が固まる様」「棒に糸が巻き付いて太くなる様」も表します。

昨年の乙未（きのとひつじ）の年が「若葉が芽吹く年」とすれば、今年は「若葉が形となって目に映じ始める年。形がはっきりする年。固まっていく年」とも言えます。今まで水面下でやってきたことが形を表す、大きな変革の年とも言えるのが本年です。

皆様にとりまして、弥増すに素晴らしい一年となりますように、祈念致します。

病理診断科としましては、昨年からのよい流れは断ち切らないように継続し、悪い流れは断ち切り、共々努力精進させて頂く所存です。

1月13日（水曜夜10時）からフジテレビ系で、病理のドラマ「フラジャイル」が始まっていますが、病理に興味を持ってくれる人が少しでも増えることを期待しています。

内科関連の剖検へのご協力もお願い致します。



病理診断の力を握る「固定」



病理検査室 山本 彩佳

採取された組織は、固定→包埋→薄切→染色を経て標本となります。病理診断はこの標本によって行われるため、標本の質は非常に重要です。しかし、最初の工程である固定が適切に行われなければ、その後の工程をいくら適切に行っても良い標本を作ることはできなくなってしまいます。当院では、採取された組織をホルマリン溶液に浸けて固定を行っていますが、もしも生理食塩水や水道水に浸けたままにしてしまったらどうなるのかをご紹介します。以下に示すのは、ホルマリン溶液・生理食塩水・水道水に2日間浸けた組織の染色像です。

	HE 染色	免疫染色	
		CK20	MIB1
ホルマリン溶液 組織構築が保持されており、HE 染色・免疫染色ともに良好な染色結果である。			
生理食塩水 組織構築が崩れており、核所見も観察しづらい。免疫染色では染まりが弱い。			
水道水 粘膜上皮が融解し、一部はがれている。免疫染色では陽性となるべきところが染まっていない。			

固定を適切に行うかどうかで、標本の質は大きく変わります。**採取した組織は速やかにホルマリン溶液に浸けていただくようお願いします。**どうしてもホルマリン溶液に浸けるのが難しい場合は、生理食塩水に浸したガーゼなどで包み、速やかに病理へ提出し固定してください。



血管診療技師を取得しました

生理機能検査室 永井 仁志

血管診療技師 (clinical vascular technologist: CVT) とは血管診療に携わる臨床検査技師、看護師 (准看護師)、臨床工学技士、診療放射線技師、理学療法士が取得可能な認定資格です。臨床における CVT の役割は血管疾患の診断、治療介助から予防、日常生活への復帰までのトータルケアを担うことです。私は臨床検査技師として、頸動脈や下肢静脈などのエコー検査や、ABI や SPP (皮膚灌流圧) などの血管機能検査に従事しています。血管疾患の評価には生理検査は簡便かつ重要なツールです。動脈硬化疾患は全身に及ぶため、心筋梗塞で来院された患者に頸動脈狭窄症や閉塞性動脈硬化症が偶然発見されることもあります。また深部静脈血栓症は入院患者における重要な合併症でありエコーによる早期発見が重要です。当センターの血管診療に貢献できるよう、今後も研鑽に努めたいと思います。